

未知・未踏に踏み込んで 新しい産業を興せ!

「光」の技術をもって、小柴昌俊教授のノーベル賞受賞に貢献し、
欧米の物まねでない、日本発の新しい産業の創出を提唱してきた晝馬社長が熱く語る、仕事、人材、企業の使命、
そして、二〇五〇年にめざす、本当の「ジャパン・アズ・ナンバーワン」とは――

**人の成長は、素朴な発想と
実現するための情熱が
あるかどうかにかかっている**

片方―私は二〇年ほど前に、浜松ホトニクスにお邪魔したことがあります。当時、「浜松に「光」を研究して製品にしているすごい会社があるので見学したい」という声が、東京の経営者の人たちから出たために、皆さんと一緒に訪ね、晝馬社長からお話を伺ったことがあります。私が解説の役割をさせていただきました。

それ以来、御社をウォッチングしていましたが、二〇〇二年、東大・物理学教授の小柴昌俊先生が、実験施設「カミオカンデ」で、超新星の爆発で飛び出した一七万光年前のニュートリノ（中性微子）を捕らえた業績で、ノーベル物理学賞に輝きました。そのとき、ニュートリノをキャッチする光電子増倍管を作った、晝馬さん率いる浜松ホトニクスが再びクロースアップされま

した。私は、「二〇年前に直感した、晝馬さんたちの研究と製品にかける凄い情熱が、ここで実った」と、感慨一入でした。

晝馬―あのときは、さすがに大騒ぎになりました。我が社もともと、一九五三（昭28）年に、「テレビの父」と言われた高柳健次郎博士の「光を電気信号に変える技術」を継承するとともに、「人類未知・未踏の領域を追求する精神」を受け継いで設立した「浜松テレビ」ですが、一九八三（昭58）年、現在の社名に変更しました。

片方―最初は三人で始めた会社だったわけですね。
晝馬―日常働いているのは三、四人でした。以来一貫して、「高柳イズム」をバックボーンに、光を電気信号に変える、光と物質の相互作用に関する研究に没入していくうちに、光に対する考え方が深まっていったと思います。

片方―今や「光」をキーワードに、がんや認知症などの早期発見に有用な「PET」（ポジトロン放射断層撮影）装置や、血液検査などの医療用途をはじめ、半導体製造や検査などの産業用